

読賣新聞

平成時代

両陛下の道*中

天皇、皇后両陛下下の国際親善は、政治や外交の利害とは一線を画し、日本への信頼感を培ってきた。

■米國

「真珠湾は訪れず」「官僚が管理する日程」――。

1994年6月、17日間の日程で米大陸を横断した両陛下の訪米を、現地メディアは当初、冷淡に報じた。80年代に始まる日米貿易摩擦の影響もあった。経済進出と先の大戦を絡め、「日本は侵略的」「信用できない」と評する動きもあった。だがやがて、現地の反応は温かいものに変化する。ニューヨーク近郊の福祉



天皇陛下がオランダで「戦争の傷」に言及されたことを報じる2000年5月24日の読売新聞



米ロッキーマウンテン国立公園で散歩される両陛下(1994年6月19日)

日本への視線和らいだ

施設で、少年からももらったおもちゃの紙幣を見せ合いい、喜ばれる両陛下の姿が、市民を笑顔にした。ロッキーマウンテンの麓の散策では、車から降りて駆けだす皇后さまや、「カメラを忘れた」と車に戻る陛下の飾らない姿が、話題になった。

ニューヨーク・タイムズは後日、この散策の写真とたようだ」と証言する。

■オランダ

両陛下が交流400年の節目にオランダを訪問されたのは2000年のことだ。大戦中、旧日本軍が現在のインドネシアで施設に収容したオランダ人らに強い反日感情が残っていた。

昭和天皇の大喪の礼(1989年)の際、「反対にかつた上海で、市民から熱

配慮して出席しないことにした」という手紙が、当時のベアトリクス女王から天皇陛下に届いた。00年当時のオランダ大使池田維氏(78)は赴任前、陛下からこの手紙を見せられた。

■バルト3國

オランダ訪問で両陛下は、市民の前で戦没者記念碑に長く黙とうされた。陛下は晩餐会で「今なお戦争の傷を負い続けている人々のあることに、深い心の痛みを覚えます」と述べられた。

皇后さまは91年、バルト3國の独立を祝福し、和歌に詠まれた。3國は1940年、旧ソ連に併合され、日本で大きく報道された。関係者によると、皇后さまは子供心に当時のことを記憶されていたという。

和歌の機運を高国を巡られた。独立運動の犠牲者を慰霊されたリトアニアでは、政府高官が「歴史の浅い我が国が広く認められる機会だ」と喜んだ。各国で陛下は必ず、先の大戦やその後の苦難に立ち向かった国民に敬意を示された。戦前の記憶も胸に平和を希求された両陛下の思いは、戦後長く「鉄のカーテン」で隔てられていた国々にも届けられた。

△平和願い親善6面▽